

水の話／プチ・シネマ・バザール（1957～1989）

UNE HISTOIRE D'EAU
ONGYILKOSSAG
TMA, SVETLO, TMA
UNUSUAL GROUND FLOOR CONVERSION
RIGE

メディア 映画

ジャンル ドラマ

製作国 フランス／ハンガリー／ギリシャ／チェコスロバキア／イギリス

時間 71分

初公開日 1994/03/19

公開情報 新日本映画社

【解説】

トリュフォー、ゴダールの唯一の共作である表題作をメインに（というかそれを見せたいがために）、5本の短編を集めたアンソロジー。57年に評論家から転身し、自らの製作プロダクションを興したばかりのトリュフォーは、パリでの大洪水を即興で映画にしようとカメラを抱え撮影に乗り出すが、結局まとめることはできなかった。この、そのままになっていたフィルムの編集をゴダールが買って出て、二人の共同監督作としたのが「水の話（UNE HISTOIRE D'EAU）」である。滞在していた地方からパリに出向こうとして、おびたしい水の流れに実際に立ち往生してしまう二人の主演者の生の姿（まだ初々しいブリアリ、はつらつと愛らしいディム）、そこから生まれる真の感情が心浮き立つ感興をもたらす。トリュフォーの優しく流麗な映像に、ゴダールが破天荒で軽快なリズムとジャズ・センスを与えた珠玉の一編と言えるだろう。見るべきものはまさにこれ一本だけで、後はハンガリーのフェレンツの「詩人ユーゼフ・アッティラの少年期（ONGYILKOSSAG）」（若くして自死を遂げたプロレタリア詩人の貧しい少年期と窃盗事件、最初の自殺未遂を描く）の暗い叙情が記憶に残る程度。ギリシャのカパカスの「ストライプ（RIGE）」は単なるサイレント期コメディへのぴりっとしないオマージュに過ぎず、シュヴァンクマイエルの粘土アニメ「闇、光、闇（TMA, SVETLO, TMA）」はこの場にはそぐわず無理やりはめ込んだ感があり、イギリスのハーマンの「奇妙な隣人（Unusual Ground Floor Conversion）」もスマートな「モンティ・パイソン」ぐらいの印象。いずれも「水の話」の引き立て役と考えるなら、せめて水にまつわる話で通すとか、もう少し工夫が欲しかった。

【クレジット】

監督	フランソワ・トリュフォー	Francois Truffaut	（「水の話」1957・フランス）
	ジャン＝リュック・ゴダール	Jean-Luc Godard	（「水の話」1957・フランス）
	コーシャ・フィレンツ		（「詩人ユーゼフ・アッティラの少年期」1967・ハンガリー）
	コンスタンチノス・カパカス		（「ストライプ」ギリシャ）
	ヤン・シュヴァンクマイエル	Jan Svankmajer	（「闇・光・闇」チェコ）
	マーク・ハーマン	Mark Herman	（「奇妙な隣人」イギリス）
出演	ジャン＝クロード・ブリアリ	Jean-Claude Brialy	（「水の話」1957・フランス）
	カロリーヌ・ディム	Caroline Dim	（「水の話」1957・フランス）